

「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 中山健太郎

本年度は、当研究班の最終年度に当るので全般をふり返って見たい。

動物行動学的研究を、人間の行動にむすびつけるのは、Wernerらの原始心理学研究と同じくまだむずかしいように見える。

本研究班の中心は、母子関係で、しかも行動心理学的手法によっている。

胎児、新生児のsensory-perceptualな発達および行動については、方法論および知見をいくつか示していただいた。

BrazeltonのNBASを、Baileyの発達や母子相互作用や家庭観察の尺度にむすびつけて、日米の比較、予知能の検討をした成績なども先決論的発想を免れていないようである。

母子関係について正常児のそれ、気質、言語習得、障害児、CP、心身症について広く検討をいただいた。

乳児期の母子関係はほとんど正常で、被虐待

児もアメリカに比して少ないことは、喜ばしいことである。日本人の心情や行動特性について、もっと日本的対応があってよいのではないかとと思う。

母子関係検査法としてFRIなど3つの方法とデータが示されたが、将来psychosocialな問題のケアや研究の基礎ともなり得るものであるから、比較検討が望まれる。

母子関係、親準備性については、現状調査から教育に進んでほしい。

新生児、未熟児の母子接触交渉については、病棟内ケアとの関りが大きいので進展が望まれる。

全体にbiosocialな問題は方法論的に本質の追求がむずかしい感をうけた。また発達とは何かを根元的に問い直す必要もあろうし、行動主義的研究手法の限界を知る必要もあろうと思われた。